

平和意識の発達と心理学の課題

伊 藤 武 彦

人間発達研究 創刊号 (2002) 抜刷

和光大学人間関係学部紀要 第7号 第2分冊

平和意識の発達と心理学の課題

伊藤 武彦

21世紀を迎えて、平和の文化を推進することが課題となってきた。人類の歴史から見れば戦争を始めたのは約1万年前にさかのぼることができるに過ぎない。子殺しをする類人猿もいれば、ボノボ（ピグミーチンパンジー）のように紛争を平和的に解決する霊長類もある。平和の文化をすすめるために「世界の子供たちのための平和と非暴力の文化国際10年」が2001年－2010年にさだめられCPNN（平和の文化ニュースネットワーク）などの活動が行われている。平和意識についてアダムズは、「価値観と目的意識」、「怒り」、「行動」、「組織化・ネットワークづくり」、「自己肯定」、「世界と歴史との連帯」の6段階説を唱えた。この説との関連で平和の心理学の課題は、生涯発達の研究、役割モデル、態度形成、期待の効果、問題行動のとらえ方など、学習心理学・感情心理学・活動心理学・組織心理学・自我心理学・臨床心理学・発達心理学など多方面にわたる事を論じた。

はじめに

9. 11事件から1年あまりが過ぎ21世紀も3年目に入った。前世紀末近くに冷戦が終わり、平和な世界への幕開けとの人々の期待は裏切られた。別の形の紛争が民族や宗教間、大国の覇権主義などから次々と起こり、嵐の前の緊張も高まっている。人間は理性で問題を冷静に解決でき平和を目指すはずだと思うのは幻想であろうか。悲観主義やあきらめに陥りかねないが、このような状況にある今こそ、諸科学が現状の打開と平和な国際秩序の形成にと力を合わせるべき時であろう。本論文は心理学、特に発達心理学の領域から平和の課題を中心にその可能性をさぐりたい。発達は普通個人を意味するが、広義には動物か

ら人間への進化、人間も未開から現代文明への変化を含み、個人の発達も長寿化や社会の複雑化などにより、成人以降へと視野が広がりつつある。そこで以下は、平和を希求し、人類の衰亡を防ぐ上で心理学が何をなし得るかについて3つの角度から検討を試みたい。第1は、動物行動学・考古学も援用して平和と暴力の系譜を個体発達と系統発生に即して省み、第2には2000年以降国連やユネスコが世界各国に「平和の文化」の実現を呼びかけていることとそれをめぐる動きについて述べ、第3に、心理学者が平和意識の発達についておこなった研究を解説する。これらの3つの作業をふまえて平和と心理学の関わりを考えていく。

1 動物から人間の進化における暴力と平和の系譜

1-1 動物一般の暴力と平和

前世紀に発祥した動物行動学によれば異種間また同種の動物間でも争いや殺戮が日常的に観察される。しかしこれらは、直ちに平和の対極としての暴力ではない。肉食の主がエサの動物を捕食するのは、生存のための妥当な行動で、人間も同じである。同種間の闘争はオス対オスの間が一般的で、メスの獲得やテリトリーを守るための、これも妥当な行動で、強いオスの子孫を残すという種の保存の大目的に沿っている。したがって、争いは勝敗が決するまでが原則で殺戮に到らず、ローレンツ他の観察では敗北のサインが種ごとに生得的に決まってい、その提示により争いは終わりを告げる。いわば平和的解決にいたる。敗者復活機会の保障であり、個体数を減らさぬ意味では、やはり種の繁栄を支えている。

他方で同種内の殺戮が生ずるケースもいくつか観察されている。その一つはエサ不足や必要なサインを欠く場合で、前者による共食いはかなり多くの種で見られる。後者は、弱ったり巣から離れたりして子どもであることの表示不足となった子を親の動物が食うケースである。クモなどに見られる交尾後メスがオスを食う習性は、子孫に栄養を贈る、やはり種保存という合目的行動である。種内の殺戮の2つ目は、群れて暮らす動物でオス同士戦って勝敗が決まり、敗者が追い出されて新しいオスがボスとして群に入った場合、前任者の子どもを殺すケースである。ライオンの群に見られ、また、チンパンジーでも起こることが実証された。これは前述の種の保存の原則と反するが、弱いオスの子孫を断つ

という酷薄なかたちで一側面を支えるともいえる。

1-2 ヒトの暴力や殺人

ヒトは、腕力や噛む力など素手での戦闘力は劣るがチンパンジーを上回る知力で繁栄の保障を築いてきた。暴力に歯止めがかからず、人類史を見ると何千万人もの殺し合いをおこなってきたのは自然現象のように考えて良いのだろうか？全動物に共通な遺伝的闘争プログラムが種の優位の保証によって解放・増幅され、個体数増による食物不足予測も手伝って弱い群の淘汰を是認するに至ったのか？「はじめに」で述べたとおり、最近の数世紀はほとんど絶え間の無かった戦争、特に2度の世界大戦と核兵器による大量殺戮を知るわれわれは、この問いに肯定で答える、つまり人類の暴力と殺し合いを不可避とあきらめる心境におちいりかねない。しかし、これらの考え方に対して科学者たちは1986年に『暴力についてのセビリヤ声明』でその科学的根拠がないことを明らかにしてきている。

また、最近の考古学の研究によって、ヒトが殺し合いの闘争を始めたのは、今から約1万年前であることが実証されつつある。出土する人骨が不自然な壊れ方をしている（脳の陥没や鏃などと一緒に出土される）、しかもそれらが複数同じ場所から発見される、鏃の大きさが動物を射るにしては大きすぎる、吉野ヶ里遺跡のように環壕集落で村を外的に守る構造になっているなどが、実証されてきている（佐原 1999）。このように1万年にわたって殺し合いを続けてきた証拠がある。

1-3 平和な類人猿の発見

ボノボと名付けられている類人猿の発見は比較的最近のことである。この類人猿は外見

がチンパンジーと似ており、生息地もアフリカ中部のコンゴであった。20世紀になってようやく別種であることが判明したのであり、以後急速に研究が進んだ。観察・飼育と実験により、ボノボがチンパンジーと違って平和的な行動特性を持つことがわかってきた。同じエサ場で群が出くわしたときなどに威嚇行動が生じることは他種とおなじだが、オスが勝敗を争う代わりに、メスがイニシアティブをとってホカホカと呼ばれる擬似性行動や実際の性行動によって、人間でいえば挨拶にあたるサイン動作を交換することにより、緊張のともなった紛争を平和的に解決するのである。

しかも他のサルや多くの哺乳類はオス優位だが、ボノボではメスが重要な地位を占める。群でボスになるためには母親の順位や力があるのをいうのである。形はやや小さいが、体力はチンパンジーに劣らず、知力も、飼育や野外観察で同等であることが証明された。このような種が平和的に実在することは、前項で述べた、ヒトの暴力の不可避性というわれわれのおちいりやすい悲観的な見方に確かな反証を提供する。

1-4 ヒトの暴力性と『セビリア声明』

1986年ユネスコの後援で動物行動学・生物学・遺伝学・社会学、そして心理学など11の専門分野にわたる12ヶ国20人の研究者がスペインのセビリア市に集まり、1-2で挙げた問いをめぐって真剣に討論した。その結果発表されたのが『暴力についてのセビリア声明』である。5項目にわたり、ヒトが動物一般と同じ闘争をつかさどる神経装置や遺伝子を持つが、それを野放図に解発し殺戮行動を繰り返したのではないことを証拠を挙げて述べている。これらの機構を備えることにより、

ヒトも生物学的には殺戮戦争をすることが十分可能だが、同時に社会的協力へのそれらも同じように持っており、どちらがどのように発現するかは、複雑な諸条件、特に生後の教育の経過や経験に著しく左右される。つまり言語やそれがつくる共通のイメージ、道具の開発と使用（武器も含め）など学習の比重が高い、いわば文化の影響こそが大きいという論旨である。『セビリア声明』はこうして諸科学が平和に関わる課題に共同して取り組むことが可能なこと、そして心理学もその一端を担いうることを実証した意味でも重要である。

なお、ヒトが地球に姿を現したのはいつ頃かについても分子生物学をはじめとする諸科学の協力で次第に確かな期間が限定しつつあり、400万年前—700万年前という推定に至っている。1-2で殺し合いの歴史が1万年前からと聞けば悲観論が高まりそうだが、この推定とつきあわせれば、それは人類史の約400分の1である。4メートルの人類史年表があるとする最後の1cmにすぎない。なお不確かさは残るとはいえ大づかみにいって、やはり人類の殺し合いは生得的装置や遺伝子の解発ではなく、たとえば階級分化や富の偏在や搾取など社会的なものをふくむ広義の文化的諸条件によるものであるという推定が力を得てくるのである。

1-5 20世紀の平和への希求

人類が文字を持ったのは、古代のパピルスなどで見て紀元前4000年頃にさかのぼる、この間の人類史つまり記録に残るものでいうと戦争も絶えなかったが平和への希求も伴って起こり、現在に近づくほどそれが増してきていることが見てとれる。1899年オランダのハーグで開かれた世界平和会議はその一つで、戦争の20世紀は平和への明らかな動きも伴っ

て始まったのである。また、次章でのべるとおり、平和の内実となる事柄はさまざまであるが、そのひとつである植民地支配は20世紀後半に次々と姿を消し、人種差別の顕著だったアメリカ合州国でも公民権運動の結果、制度的差別は廃止された。また、世紀末近くの南アフリカでは、アパルトヘイトの廃棄が民族間の武力闘争でなく平和的に達成された。女性の地位向上も、内実はともかく、制度的には多くの国で実現しつつある。ボノボと同様に、人類での女性の尊重は、平和的行動習性とかなり対応するようである。

これらの変化は、動物からの進化に続く、人類第2の発達、未開から文明への流れの中にある。20世紀はまた、2度の大戦にともなう国際連盟と国際連合の2つの国際機関が、戦争のない世界をねがって歴史上はじめて創られた世紀でもあった。そして最後の2000年に国連は「平和の文化」の推進を世界各国に発信するに至った。

2 「平和の文化」と平和教育

2-1 「平和の文化」とは：国連決議による宣言と行動計画

日本では政府が不熱心であり、いまなお周知されているとは言い難いが、2003年は「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」の3年目である。スタートする前年の2000年は「平和の文化国際年」であった。合わせて11年間の「平和の文化」運動を国連総会は1999年9月に「宣言」と「行動計画」の2つで世界に呼びかけた。その際のアナン国連事務総長のメッセージは、国連の主要な任務は「戦争の惨禍から次の世代を守ること」と書き出し、しかし約半世紀の経験から「社会が紛争によって荒廃した後で平和構築に努

力するだけ」また「予防外交をおこなうだけでは十分でない」と述べ、「永続性のある平和のためにわれわれは、もっと深いレベルでも行動しなければなりません」としている。これが「平和の文化」の提唱の意味である。

「宣言」は第1章で平和の文化とは生命と人権の尊重、非暴力の促進、国の独立と発展の権利、男女平等などの各項目にわたる「価値観、態度、行動の伝統や様式、あるいは生き方のひとまとまりのものと定義し、第3条ではその実現に「必要不可欠」な事柄として「紛争の平和的解決」に始まる14項目が列挙されている。「行動計画」は、それらをさらに「目的と進め方、担い手……国内的、地域的そして国際的レベルでの行動の強化」にわたって、より具体化した詳細な計画書である。

2-2 ユネスコの実際的活動：「わたしの平和宣言」など

国連総会の提起をうけとめてユネスコは、「生命尊重」「非暴力」「助け合い」「傾聴と情報公開」「地球環境」「連帯の再発見」の6項目からなる「わたしの平和宣言」をつくり各国で署名運動をはじめた。どの項目も「わたしは……します／しません」と内省的な誓いの言葉であり、短くわかりやすい。これはユネスコ憲章の前文にある「戦争は人の心の中に生まれるものだから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という提言の具体化でもある。署名は2002年12月現在7500万人に達し、日本でも100万人という目標を達成した。『セビリア声明』の3年後にアフリカのコートジボワールで開かれた平和会議もユネスコの主催で、このとき「平和の文化」の語が初めて使われたのである。つまりユネスコはこの概念の創始者であり、国連

全体に広げた後も中心的な担い手である機関である。

しかもユネスコは会議や声明や署名の活動などだけではなく実際の紛争解決にも乗り出している。たとえば中南米のエルサルバドルでは、政府軍とゲリラとの内戦に1993年に調整役として入り、和解を推進したケースがある。内戦後のままで放置しておけば情勢が再び逆戻りしかねないと見てユネスコは、病気後のリハビリともいえる提案を双方にした。女性の地位を高めるプロジェクトを共催し、ラジオもない家が多いことを配慮して、市場に拡声器をすえつけ、夫は妻を殴ってはいけないなどの啓蒙的な放送をした。これは紛争当事者どちらの利害や関心からも当面離れた提案だが、全体的な平和の文化の土壌を育成し、平和を持続するために効を奏した。

2-3 予防の心理学と平和

エルサルバドルの事例は予防心理学あるいは健康心理学でいうと、3次予防にあたる。健康体にいるには病気の予防が効果的で、これには3段階ある。不幸にして罹患してしまったら薬や手術などで患部を治療するだけでなく、リハビリテーションや再発予防の取り組みをするのが3次予防である。2次予防は健康診断などで病気の早期発見・治療をはかることである。しかし、大事なものは病気そのものを寄せ付けないように日常の健康管理をすることであり、栄養・運動・規則正しい生活・歯磨きの励行などにより生活習慣病や虫歯にかかりにくくすることが1次予防の例である。

平和の問題と対応させるとすでに勃発した紛争を調停してとにかく止めさせ再燃を防ぐ手だてをおこなうのが3次予防であり、紛争解決・復興・和解などがこれにあたる。国連

の平和維持軍もこの3次予防の手段だが「それでは十分でない」と国連事務総長が主張している(2-1)。国家や地域間で、軍隊の増強などやがて紛争に到りそうな兆候を見つけて早めに手を打つこと、たとえば第3国の平和的介入、国連機関による監視などが2次予防にあたる。しかし紛争を根本から防ぐには、国家や民族が事を構えないよう平常からの交流と話し合い、人々の暮らしが公平で一定程度の水準にあること、そして争いよりも連帯と相互の尊重を大切にす気持ちの広がりが必要である。すなわち「平和の文化」の認識と不断的努力が地球にゆきわたることが最上の予防であり、1次予防なのである。

そのために心理学は平和の実現と維持発展に貢献しなければならない。

2-4 「平和の文化」ネットワークづくり

さきにのべた「わたしの平和宣言」の署名運動(2-2)はその一環として世界各地で、相見ることのない何千万人の連帯を深めているが、これと並行したインターネットによる地球規模の運動の展開が、「平和の文化ニュースネットワーク(略称CPNN)」である。日本では和光大学の伊藤研究室にサイトを置き平和に関心ある人は誰でも自由に投稿し、またニュースやメディア情報をパソコンで見ることができる。たとえば、自分の平和体験や意見、薦めたい本や感動した映画のタイトルなどを文章で、時には写真付きで投稿したり、平和運動の一端を紹介する事などをおこなっている。

投稿記事は、ストレートに掲載されるのではなく、前に述べた国連決議や「わたしの平和宣言」署名文にてらして作られた8つの「平和のキー」に基づいて位置づけられ、編集され(モデレートされ)た上で公表される。こ

の仕事を担当する人は編集技術だけでなく対話の促進や論争の仲介、記事作成指導などを内容とする研修（ワークショップ）を受けることになっている。目下の所、学生たちがその役を担っており、彼らの平和意識を育てる点でも良い機会となっている。使用言語は、英語・ロシア語・アラビア語・スペイン語・中国語・フランス語そして日本語と、多言語でおこなわれている。国境を越え民族や言語を超えた連帯が若者を中心に体験の中で相互形成される貴重な機会となるのである。

2-5 平和教育と発達の問題

世界共通で進めることはインターネットだけではない。国連の「行動計画」には重要な領域として教育が挙げられ、その担い手として学校等の関係者への期待が書かれている。特に「世界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国際10年」では、ユネスコとともにユニセフも担当部局となっている。平和教育というこれまで日本では、広島・沖縄の修学旅行や、被爆者・犠牲者の語り部に話を聴くなど、主に戦争とその結果を教えることが中心になっていた。しかし国連の「平和の文化」の提唱は、平和の対極は戦争という直接的暴力だけでなく、他の構造的な暴力も問題にしなければならないことを示している。文化祭で環境・人権問題を扱ったり、各地の生徒が「世界の子どもの平和像」建設運動に参加したりする例も生まれてきている。日常の授業やクラブでもクラスの問題の事態を自分たちで考えて解決する、外国籍の子らと交歓するなどがある。最近問題になっている総合学習を活用した試みなど、今後「平和の文化」を推進する方向の活動の機会が増すことが期待される。

教育面に限らず平和の概念自体も、これま

で長い間、戦争の反対概念に、つまり戦争が無い状態を意味すると思われてきた。しかしノルウェー出身の平和学者ヨハン・ガルトゥングが提唱し広まったのは、平和とは戦争のような直接的な暴力だけでなく搾取や不正や不平等や抑圧の無い状態、すなわち「構造的暴力」を克服し得た状態を意味するものであるという考え方である。彼の定義では暴力とは、その影響下の人が「肉体的・精神的に実現し得たものが彼の持つ潜在可能性を下回る」に到る力である。分かりやすく言い換えると、平和とは個人の自己実現の可能性つまり「発達」が不当に妨げられることの無い状態を指すのである。

こうして平和の概念とその教育とは、特に特定の事柄への限局を超えて、生活の全てに浸透し人々を動かしつつある。これこそが「平和の文化」の進むべき方向であり、一人一人が平和を創造する主体となることが求められている。

3 平和意識の発達とモデル学習

3-1 平和の建設者たちにみる平和意識の発達論

一人一人の個人がどのようにして平和の担い手に成長できるのか、という難問に取り組んで興味深い研究をした人がいる。デイビッド・アダムズといい、ユネスコで平和の文化プログラムの責任者をつとめた米国出身の心理学者である。

研究方法は平和を創造することに貢献した歴史上の人物を選んで、伝記・自叙伝などを集め彼らがどのような育ち方や運動とのかかわり方をし、後世に残る業績をあげたかの共通点を探ったのである。対象の人物中にはキング牧師、ネルソン・マンデラ、バートラン

ド・ラッセル、マハトマ・ガンジーなど知名度の高い人たちがいる。出身国、経歴、活動期間等は、人様々だが、多数の例を見渡すことで最大公約数的プロセスを抽出することができた。困難に遭ってもくじけずねばり強く、人を押しのけるのではなく共同・共生を求めて活動を広げていった軌跡をアダムズは平和意識の6段階としてまとめている。

この6段階説は、ソビエト心理学の活動理論とも関連する。ヴィゴツキー、レオンチェフらに代表されるソビエトの発達心理学では、人間を育てるものは、遺伝や環境に還元されるのではなく、本人の活動が重要だとする。活動は精神・身体の両面をふくみ、その発現形態はさまざまだが、要するに時代や環境への主体的働きかけが基本的要因であり、これが周囲を変えるとともに本人をも変える、すなわち次の発達を促すという考え方である。

3-2 6段階前半の発達：価値侵害への怒りと行動

発達の6段階の第1は「価値観と問題意識」である。現代の青少年が生きる意味や目的を見いだせず疎外と孤独にさいなまれる姿を思えば、平和の持つ価値を信じ目的とすることの基本的重要性は理解しやすい。しかしこれらは自然に得られるものではない。意図的・無意図的の両方の教育が決め手となる。平和や人権について学ぶ場の無い子はそれらの価値に目覚める機会に乏しいが、親や教師との日常のかかわりあいや偉人の伝記、ときにはテレビドラマの主人公からも知らず知らずのうちに身につける事がある。杉田(2001)は役割モデルとして、このようなモデルの重要性を指摘している。

第2段階は「怒り」である。心理学でいうと怒りは他の動物とも共通の主要な情動のひ

とつである。エサを奪われたり身体的攻撃を受けた等の時たちまち怒りが生じて反撃に到るのは生存に合目的である。第1段階で平和の重要さと価値を知れば、それを損なう平和への道程を妨げるものに対して怒りを生ずるのは、同じく自然なことである。ただし守るべき価値が個体の生存でなく、まだ現出していない状況をイメージして確信する知的な働きを経ているところが違う。したがって侵害の克服を目指して心身全能力を動員する、つまりこの場合の怒りは目的ある長期の行動への起爆剤となるのである。

したがって第3段階は必然的に「行動」である。自身の生存を守る本能的怒りならば反撃・逃走など反射的行動ですむが、平和に関してはそう単純ではない。価値侵害への怒りは行動への直接的経路をもたず、むしろ我が身の保身の見地からは行動しない方が得策であったり、少なくとも無難なことが多い。それでも実行に踏み切るか否かが、平和創造への発達における分かれ道である。大学生にアンケートをとると、戦争は悪であり無くすべきだとほぼ全員が答えるが、では人間の歴史から戦争をなくせるかという問いには否定的な答えが各国の青年の約50%近くにある。戦争は無くせないと答えたものは、他の問いでの平和運動について学ぶ、署名するなどへの行動への消極性とみごとに対応するのである。

3-3 6段階後半の発達：自信をもって周囲に呼びかけ世界に位置づく

4つ目は「組織化・ネットワークづくり」である。平和の侵害に怒り行動を決意したとき単独で行うのか周囲に働きかけ共に歩むかの分かれ道といえる。アダムズが調べた平和の巨人たちは、各個人の状況に応じて仲間づくりに取り組んだ。労働組合など既成の組

織から出発した人、同じ人種仲間への連帯、ガンジーは孤独な法律家からインドで大衆を動かすカリスマに変身した。同志を求めるか否か、連帯の輪をどのように広げるかで、活動の成否が決まってくる。個人やマイホームに閉じこもったり、小さい仲間内で愚痴を言い合うことにとどまるならば、この発達はそこで止まると言っている。

第5段階は前段階からの照らし返しともいえる「自己肯定」である。周りに呼びかけ返信を取り入れて自己も変わる。生き方と生活の一部に平和への活動を位置づけて次へと広げる。つまりは個人の統合と運動の組織化を同時進行させて、さらなる自信を得る長期のプロセスである。アダムズは対極として燃え尽き症候群なる心理学的概念を対置する。実際に運動にのめり込む余り、生活や家族まで犠牲にして過度に働き健康を害するなどして運動から去る人がある。日本は特に「カ

ローシ」が国際語になるほどの国柄であるから要注意である。一步一步の自分づくりが、結局平和づくりにつながるのである。

最終段階は「世界・歴史との連帯」に行き着く。自分自身と組織とその活動を、発展に伴ってしっかりと世界と歴史に位置づけるか、派閥や仲間中心に終わらせ後退させるのかの分かれ道である。ある価値観を理解・共鳴し持続させるつもりで、いつしかスローガンに止まったり教条化したりすることは稀ではない。たとえば毛沢東は、中国を被侵略から立ち直らせ労働者・農民の国造りをした名指導者であったが、晩年は思いこみと身邊の少数者に偏って、文化大革命という巨大な過ちを起こした。アダムズのリストに彼の名がないのはこの終盤の段階を欠くためだろうと、と私は推測している。

以上の6段階をまとめ、平和教育の課題を対応させると表1になる。

表1 アダムズによる平和意識の発達の6段階と平和教育の課題

段階	平和的視点から見た発達の課題	平和教育の課題
1	価値観と目的意識	知識・論点の理解と役割モデル
2	怒り	正義感による不正への怒り
3	行動	調べ、表現すること
4	組織化・ネットワークづくり	グループ学習・創造活動
5	自己肯定vs燃えつき症候群	セルフエスティームの向上
6	世界と歴史との連帯	学習・創造活動による連帯すること

3-4 アダムズの発達論が持つ意味

最後に、アダムズの発達論がわれわれに語るものに触れておこう。第1は学ぶこと、特にモデル学習の発達における重要さである。このことは第1段階「価値観・目的意識」の項で無意図的学習の形で言及した(3-2)が、その面に限らず発達の6段階全般に関

わっている。見てきたとおり、平和を目指す個人・集団の成長プロセスにはいくつもの難関がある。対象者たちは気の迷いや無難な道への誘惑をそのたびに乗り越えて歴史に名を残すに到った人々である。生き方に迷いがちな子ども・青年が彼ら・彼女らの足跡を知れば、「あのようになりたい」と意欲を感じてあ

ゆみはじめ、平和への行進は若い参加者を増すことになる。「学ぶ」は「真似ぶ」という語源から来ている言われ、模倣による発達の重要性はこれまでの心理学者が論じてきたことである。

親や教師をはじめ大人たちは自らの姿を省みるとともに、読み聞かせや家庭・学校に備える本、マスコミ情報の現状などに留意する必要がある。これまで多くの時代・地域で大人たちは、どちらかというと国家を繁栄に導いたり戦争に勝利した英雄を子どもらにひきあわせて、競争に勝つことの価値を刷り込んできたのではないだろうか。

アダムズの発達論がわれわれにもたらすメリットの第2は、それが生涯発達の問題に光を当てることである。対象者たちが何歳で平和の課題に目覚めたかは、さまざまである。だが私の知る限りでは、青年期以降、多くは成人後かなり経って一步を踏み出し、以後生涯にわたって成長・発達している。キング牧師は、バス・ボイコットの時期までは、アメリカの南部の目立たない一牧師だったし、ガンジーが人種差別撤廃と植民地抵抗の大衆運動に踏み出したのは、南アフリカで法律家として仕事と生活が安定した後だった。

これまで発達といえば身長と体重などが伸びとどまり、認知的に大人と同等となる青年期までを問題にすることが多かった。アダムズのケース研究は成人後も著しい発達や生き方の急転回がありうること、しかも当人個人にとどまらず周囲や集団にも広がりうることを示した。長寿化の今日、心理学も全生涯へと目を移しつつあるが、平和という価値と関わって論じた意義は大きい。

4 平和についての心理学の課題

4-1 生涯発達の観点の確立と研究の深化の必要

3-4の後半に述べたことは、心理学が今後取り組むべき重要課題の一面を示している。人間の発達を20才頃までのものとする常識は心理学の発達研究がおちいついた狭さでもあった。そう自覚して昨今では、生涯発達への研究と領域を広げつつある。しかし年齢が低ければ個人差も少なく学校からのデータも大量に得やすいのに対して、成人以降の研究がやりにくいという面があった。

しかし人生の長寿化は社会の成熟に必ず伴う現象であり、人生50年の時代と異なるその全貌を解明して、多くの人によりよい人生を選択し、全うしうようにする責任が医学・生理学・社会福祉関係の分野とならんで心理学の課題としてある。それが「平和の文化」と重なってくる。つまり発達の保障は個人の安寧や生物的健康の目的を超えて世界と歴史に位置づける必要があるのである。

心理学はこれまで、科学、それも物理学をモデルとする自然科学的厳密さを求める余り、発達の重要な側面に注意を払ってこなかったのではないか。自然科学が事実の解明に専心して、価値と関わることを禁じてきた生き方に心理学も「真似ぶ」面があった。しかし、核兵器の惨禍からヒトゲノムまで、科学が現実社会とは別世界にあると安住してられない現在、心理学も地球と人類の運命と無関係ではいられない。「発達」概念の拡大と研究対象の広がりも、単なる量の増大や新しいデータの獲得にとどまるはずはない。

4-2 発達を左右する態度形成

われわれの周りには生命のあるものも無い

ものも入り交じって多様な事物がある。人間以外の動物では、エサ、ねぐら、敵との遭遇など生存とかかわってプラスとマイナス、また反応もほぼ生得的に決まっている。人間は元々は適しない環境でもそれをつくりかえて生きることができ、自然界に無いものを次々と作り重ねてきた。それは周囲の個々の事物にその都度、肯定的・否定的な態度を決める必要が生ずるわけである。これまで心理学では、態度の形成とその測定を社会心理学の一分野として、事物の認識、引き起こされる感情、生ずる行動の3者が態度形成とどう関わるか、結果としての態度の数量化などを行ってきた。しかし、社会の複雑化、情報の増大・加速にともなって、この面の研究も背景を広くとって実態に即した進め方が必要のように思われる。

ここまでのテーマに即して言うならば、戦争で死んだり苦しむ人々の姿を知ることで戦争否定の態度は嫌悪や憐憫の感情を軸に、かなり容易に形成できる。これに対して、平和のイメージは、自然のままの野山、普通の暮らし、生物そのものなど、すべてが関わると言ってよく、ありふれすぎて像を結びにくく態度形成が難しい。しかも戦争の鮮明なイメージは自国が関わる正義の戦いであるという宣伝によって賛同・讃美を促す肯定的なものへと転化する。こうした態度形成・変容の機微、その社会的歴史的背景を含め、心理学はふみこんで解明する必要がある。人間の認識可能性の増大とともにその不確かさをあばく事になるだろうが、こうした深淵の直観と自覚なしには「平和の文化」も底の浅いものに終わりがかねない。

4-3 期待の効果

アダムズの発達の第5段階、つまり怒りと

行動と連帯に続く「自己肯定」についても心理学はかかわりを持っている。動物はオス・メス、年齢それぞれに群の中の役割が決まっていて、行動の結果たとえば争いに勝った事実だけがボスの座を提供する。人間はこれとは違い自他のイメージが交差し変化する中に生きるので、視線を含む微妙で無意識的な相互交流（コミュニケーション）も発達を左右する。

小学校1年生の担任に、クラスの誰々は知能が高いのに成績はそれほどでもないのもっとのびる可能性があるかと教示する（事実ではないし倫理上問題がある）実験がある。その約1年後にテストをすると該当する子どもらの点数が実際に跳ね上がったという結果が出た。おそらく教師の視線やコミュニケーションの細部に意識しない微妙な期待が生じて子どもらに変化が生まれるのである。これを「期待効果」あるいはギリシャ神話にちなんで「ピグマリオン効果」と呼ぶ。彫刻の上手な王が自作の女性像に恋をし、神に頼んだところ神は像にいのちを与え2人は結婚する、つまり石が人になるほどの変化が人間には可能だという話である。

似た効果を自己暗示で生じさせることもできる。自分はやれると信じ、良いクラスと思いこむ子は、自分はどうせダメだ、最悪のクラスだと思いこむ子どもより、知らず知らずその能力が増し、クラスをよくする行動をする。事実からあまりに離れた誇大妄想では精神病理にもなるが、自己を肯定する、教師がクラスの子ども一人一人の力を信ずる、虐げられた民族でも「やれる」自らを励ますことがその実現につながる、自他の発達を左右するということを、歴史が、また平和の偉人たちも実証している。

4-4 平和意識の発達と心理学の課題

自己にあるいは集団に隠れた力を信じて行動しても期待が常に満たされるわけではない。むしろ困難にぶつかり挫折する場合の方が多いただろう。そこであきらめて信ずることをやめ、旗を降ろしてひっそりちこまるかどうかは、本人や集団の発達の危機である。これまでの世間の常識では、そうした危機のつまずきのない発達を是認してきた。授業を妨げクラスを乱す問題行動は矯正される。障害児は不足の部分を補って健常者に近づくようにする。不登校はとにかく学校へ戻す説得や誘導につとめる。これらに共通なのは普通の発達に生じたじまな出来事をできるだけ早く処理して正常のルートに戻す努力である。発達の危機を悪いものととらえ手早く修復して安堵するのだ。

発達の危機のもう一つの見方は、新しい展開へのチャンスかもしれないとする視角である。ある子どもが示す誤りは他の子にも内在する問題の暗示かもしれない。障害児や「問題児」のいるクラスは、条件が整い教師が工夫すれば一段深いところで心が通い合うクラスにまとまるかもしれない。不登校が、今の学校制度の見えにくい欠陥を指し示す「誰にでも起こりうること」へと認識が変わるには、

かなりの歳月を要した。問題行動を発達への要求ととらえる視点が必要である。

危機のない保護ずくめの発達はひ弱な主体性しか育てないのではなかろうか。子ども・大人各人の個性的な発達を妨げない社会は、問題やつまずきを避ける妥協からは生まれず、危機をチャンスとして新しいあゆみを進む中で実現するであろう。戦争や暴力は問題を一挙に押さえ込んで一見解決したようにみえても、やがて矛盾が露呈する。「平和の文化」への歩みは挫折や危機にあふれているに違いない。そのたびに絶望せず燃えつきず、自他の信頼で乗り越えていくために心理学は何ができるだろうか。

表2は、アダムズの6段階説に対応する心理学の分野と、応用例についてまとめたものである。もちろん、これらの領域や例がすべてではない。たとえば杉田(1997)は平和心理学のより包括的な構図を示している。今回は、平和のリーダーたちの生き方に学び整理して心理学の課題を述べてみた。3回目の千年紀に入った現代の世界で、科学自体が大きく揺らぎ定説のくつがえる中、個人の発達を人類の発展と地球の発達に結びつけて考える方向において、心理学の新しい道がひらけるように思える。

表2 アダムズの6段階説に関連する心理学の領域と研究テーマ例

アダムズの6段階	心理学の領域	研究テーマ例
1段階	学習心理学	ビッグマリオン効果と役割モデル
2段階	感情心理学	正義感の怒りとコーピング
3段階	活動心理学	共同活動、コミュニケーション活動
4段階	組織心理学	リーダーシップ、集団力動
5段階	自我心理学	自己像・自己評価
	臨床心理学	燃えつき症候群
6段階	発達心理学	生涯発達論

〔参考文献〕

- アダムズ、D（編）中川作一訳 1996 暴力について
のセビリア声明：戦争は人間の本能か 平和文化
化
- Adams, D. 1987 *Psychology for Peace Activists*.
Advocate Press, New Haven: CT
- 平和の文化をきずく会（編）2000 暴力の文化から
平和の文化へ：21世紀への国連・ユネスコ提言
平和文化
- 平和の文化をきずく会（編）2001 脱暴力宣言：「世
界の子どもたちのための平和と非暴力の文化国
際10年」にむけて 平和文化
- 佐原 真 1999 日本・世界の戦争の起源 福井勝
義・春成秀爾（編）人類にとって戦いとは（1）
戦いの進化と国家の形成 東洋書林 Pp. 58-100
- 杉田明宏 2001 平和のモデル 心理科学研究会
（編）平和を創る心理学 ナカニシヤ出版
- Wrangham, R. & Peterson, D. 1996 *Demonic males:
Apes and the origins of human violence*. 山下篤子
訳 1998 男の凶暴性はどこからきたか 三田
出版会